

研究概要報告書【音楽振興部門】

(/)

研究題目	現代クレズマー音楽の様式について	報告書作成者	三代真理子
研究従事者	東京藝術大学 教育研究助手 三代真理子		
研究目的	<p>本研究の目的は、現代クレズマー音楽の演奏様式の解明である。クレズマー音楽は400年以上にわたって中東欧ユダヤ人社会の生活の一部として発展してきた民俗音楽であるが、周辺にある他の音楽ジャンルの影響を受けつつ、現代では多様な演奏様式を持つ音楽へと変化している。本研究では、現代クレズマー音楽の発展の原点といえる1970年代の「復興期」以降の演奏様式の変化に着目し、その特徴を分析する。</p> <p>クレズマー音楽の様式は、哀愁を帯びた音色、多彩な装飾、独特なニュアンスによって作られている。これらの特徴は「復興者」たちにより追求され、彼らの演奏に強く反映されている。クレズマー音楽においては、それが口頭伝承で伝わってきたがゆえに、固定化された旋律よりも、それを表現するための演奏様式が重要である。従来の研究にはジョエル・ルビンによる装飾と奏法に関する部分的研究があるが、クレズマー音楽の様式に関する体系的な研究はない。また音楽家たちにより「復興期」以前の伝統様式の調査が進められてきたが、「復興期」以後の様式やその変化はほとんど調査されていない。</p> <p>調査では、「復興期」以降、現代クレズマー音楽界を主導してきた音楽家たちの演奏様式を、フィールドワークと音楽分析により明らかにする。まずフィールドワークについては、ドイツ・ワイマールのユダヤ音楽祭「Yiddish Summer Weimar」(2018年7-8月)と、米国・ニューヨークのユダヤ音楽祭「Yiddish NY」(2018年12月)で、参与観察と現代音楽家へのインタビューを実施する。これらの音楽祭は、中東欧ユダヤ人社会が失われた現在では、クレズマー音楽の伝承の重要な場として機能している。そこで音楽祭のワークショップの指導法の観察と、聞き取り調査により、指導にあたる現代音楽家たちの様式の解釈を明らかにする。次に音楽分析では、第一に、多様化する現代クレズマー音楽全体の現状を把握するため、ウェブ上の情報と音源資料を用いて、地域的分布と演奏様式のタイプについて傾向を読み取る。第二に、「復興期」から現在まで継続して活動を続けてきた三つのクレズマー演奏団体、ブレーブ・オールド・ワールド Brave Old World、ザ・クレズマティクス The Klezmatics、ザ・クレズマー・コンサバトリー・バンド The Klezmer Conservatory Band の演奏様式を、録音資料を用いて明らかにする。</p> <p>分析では、旋律表現、伴奏リズム、楽器編成、テンポ、曲構成に着目する。対象曲のうち、「復興期」以前の録音を原曲とするものも多く、その場合は、原曲との比較に基づいて、類似性と差異を示す。新たに創作された曲については、「復興期」以前の伝統様式の保持や、そこからの逸脱を判断する。これによって個々の団体の演奏様式を明らかにするとともに、「復興期」から現在までの変化も調査する。</p>		

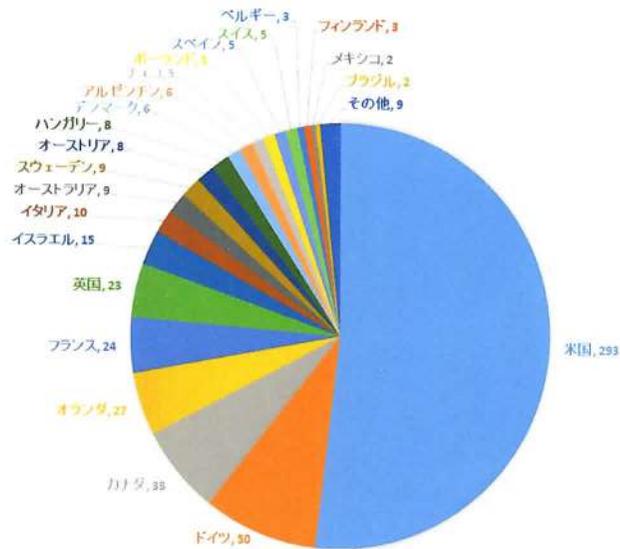
研究内容	<p>現代クレズマー音楽の演奏様式を解明するために、以下の三つの調査を行った。</p> <p><u>(1)クレズマー音楽の発展の契機となった「復興期」の調査</u></p> <p>1976年から1990年代中頃にあたる「復興期」は、17世紀以降、中東欧ユダヤ人社会で演奏されてきたクレズマー音楽が、現在ワールドミュージックの一ジャンルに発展する契機であり、この時期の音楽家たちが現在のクレズマー音楽界を主導している。「復興」を担った主な団体(個人)には、ザ・クレズモリム The Klezmerim、アンディー・スタットマン Andy Statman とゼフ・フェルドマン Zev Feldman、カペリエ Kapelye、ザ・クレズマー・コンサバトリー・バンド The Klezmer Conservatory Band (以下、KCB と表記)、ザ・クレズマティクス The Klezmatics、ブレイブ・オールド・ワールド Brave Old World (以下、BOW と表記)がある。まず、「復興」が起こった要因を探るため、各団体(個人)の活動と思想を文献とインタビューから調査した。次に「復興」期の音楽とその変遷を明らかにするため、上記六団体が「復興期」に録音したアルバム収録曲の傾向を分析した。全 278 曲を対象に、曲の種類を「伝統的クレズマー」、「新クレズマー」、「イディッシュソング」、「その他」に分類し、演奏レパートリーの傾向について、各団体間の差異と、ひとつの団体における年代別推移の点から考察した。</p> <p><u>(2)現代クレズマー音楽の現状の把握</u></p> <p>「復興期」以降、現代のクレズマー音楽は急速に変容・多様化してきたが、その現状を網羅的に調査した研究はない。現状把握のため、現代に活動する団体に関する最大のウェブサイト KlezmerShack の情報、各団体の公式 HP や facebook、録音 CD 等の音源資料に基づき、演奏団体の数、地域的分布、活動内容、音楽様式を調査した。調査の過程で各団体には①クレズマーを主に演奏する団体と、②他ジャンルも演奏する団体が存在することを確認した。またその演奏内容から、①に属する団体の演奏を「他ジャンルとの融合」が主であるもの、復興期以前のクレズマー音楽の伝統様式に忠実な「伝統的クレズマー」、クレズマーの伝統の中で新たな現代性を生んでいる「現代的クレズマー」に大別し、より細かな調査を行った。また②の団体は、クレズマー音楽をユダヤ、あるいはイディッシュ(=東欧ユダヤ)の文化の一つと捉え、他のユダヤ音楽ジャンルと共にクレズマー音楽を演奏する団体と、ユダヤ人の音楽にとらわれず、様々なポピュラー音楽、民族音楽、クラシック等と共に演奏する団体とに分類した。</p> <p><u>(3)主要な演奏団体の演奏様式の分析</u></p> <p>分析は、対象三団体のアルバム収録曲のなかの、器楽曲について実施した。伝統様式調査は、旋律表現(装飾やフレージング等)、伴奏リズム、楽器編成、テンポ、曲構成に着目し、ユダヤ音楽祭での参与観察とインタビューで実施した。これらの重要な音楽要素について原曲との比較や、新たな音楽要素の特定を行うことで、彼らが「復興期」以前の様式から何を引き継ぎ、何を新たに付け加えたのかを考察した。また年代や団体ごとに、特徴的な変化の有無を調査した。</p>
------	---

研究概要報告書【音楽振興部門】

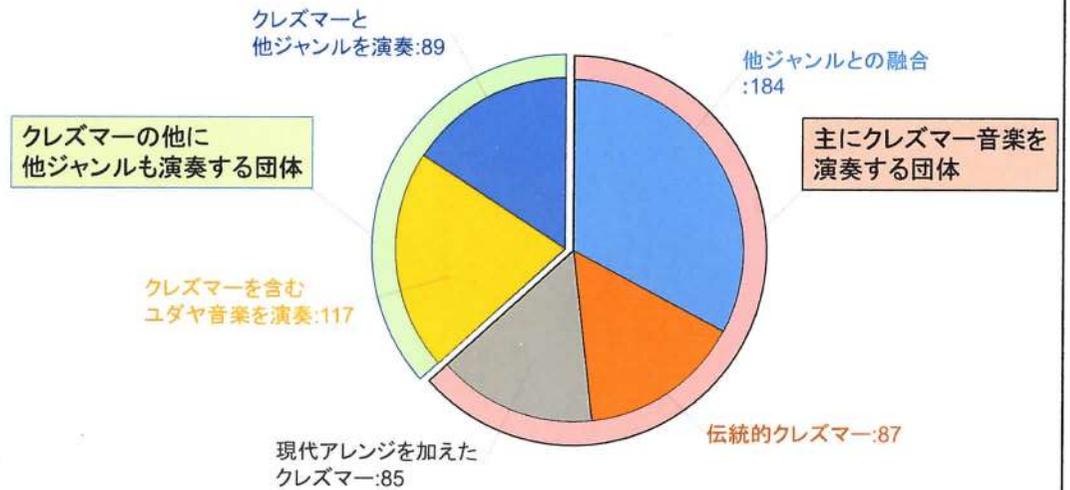
(/)

<p>研究のポイント</p>	<p>(1) 現代クレズマー音楽の演奏様式を、伝統様式と比較しながらリズム・旋律・和音進行・楽器編成・曲構成等の点から具体的に示した (2) 多様化する現代のクレズマー音楽の現状を、地域、活動内容、演奏様式の観点から分析・整理した (3) 「復興期」から現代までの様式的変化を、三つの演奏団体について分析し、それぞれ独自の方向性を持つことを明らかにした (4) 音楽家への聴き取りや音楽祭でのフィールドワークを行い、現代音楽家の演奏様式を、彼らの思想や解釈に照らし合わせて分析した</p>
<p>研究結果</p>	<p>(1) <u>現代クレズマー音楽の発展の契機となった「復興期」の調査</u>: 復興者とその演奏レパートリーを調査し、復興プロセスは伝統様式の発掘・再生と、再生された伝統様式に基づく音楽創造という流れで進行したことを明らかにした。「復興期」の音楽変化を方向づけたのは「イディッシュ性」と「コンサート音楽化」であり、クレズマー音楽は、イディッシュ様式を保持しつつ、ダンス音楽からステージ音楽に変容した。そして各復興団体が生み出した様々な方向性が、現代クレズマー音楽の多様性に繋がっているという見解を示した。 (2) <u>現代クレズマー音楽の現状(地域、活動内容、演奏様式)</u>: 現代のクレズマー団体は、世界 30 か国以上に 500 以上存在する。その半数以上が米国にあり、歴史的にアシュケナージ系ユダヤ人がいた地域が多い。演奏様式は「他音楽ジャンルとの融合様式」、「現代的クレズマー様式」、「伝統的クレズマー様式」の三つに大別される。イディッシュソング等、他のユダヤ音楽ジャンルも奏する団体も多い。 (3) <u>代表的な演奏団体の演奏様式の分析</u>: 前述の三団体の CD 収録曲の分析の結果、1990 年までは各バンド共、曲構成、伴奏リズム、テンポ、旋律表現の点で「復興期」以前の演奏に忠実である。その後 KCB が伝統様式による演奏を継続する一方で、BOW と The Klezmatics は新たな方向性を示している。BOW では、従来密接に結びついていた舞曲の伴奏リズムと旋律の関係を切り離し、旋律の変奏の幅を大胆に拡大した。また和音進行の複雑化や、現代クラシック音楽のリズムと和声の借用等、曲内で変化に富む工夫がみられる。また従来のメドレー形式とは異なり、複数曲を有機的に結合させ、統一された曲構成や物語性を作りだしている。非拍節的な旋律即興での技巧表現の追求に加え、一定のリズム・パターンの上で原曲の旋律を用いた即興を行っている。The Klezmatics は異なるジャンルの伴奏リズムをクレズマー旋法と結合させ、また電子楽器や口琴等の民族楽器により多彩な音色を生みだしている。またジャズのアドリブの導入や、急速なテンポのユニゾン演奏による演奏技術のアピール、複数曲を次々に交替させる曲構成、さらにクレズマー旋法と西欧の長／短調の混合等で、独自の音構造を作り出している。これら二団体は伝統的な旋律表現(装飾や奏法、音色、フレージング)を保持しながらも、伴奏や曲構成、音色、即興の点で新しさを加え、クレズマー音楽を現代の聴衆にあった新しい方向へ導いてきたと言える。 (4) <u>聞き取り調査と参与観察の結果</u>: BOW と The Klezmatics メンバー等のクレズマー様式解釈を調査し、伝統様式に関しては①旋律表現はイディッシュ音楽独特のフレージングやニュアンスに基づいていること、②旋律は曲の伴奏リズムと深く結びつき、そのリズムの中で変奏や強弱表現がなされること、③和音進行は単純な形であったこと等を明らかにした。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>1) 現代のクレズマー音楽で「クレズマーらしさとして保持されているもの」、また「新しい方向性の狙い」について考察する。さらに、他音楽ジャンルとの融合様式(特にジャズ、ロック、パンクが多い)を調査し、その手法を明らかにする。 2) クレズマー音楽の「復興期」から現代に至る変容プロセスを明らかにし、民俗音楽がワールドミュージックとなる音楽変容モデルを示す。</p>

現代のクレズマー演奏団体の国別分布



演奏レパートリーによるバンドの分類



(注:写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)